



産業創造

有限会社ワイ・システムズ

窒化物系LEDウエハー専用測定装置開発

若い四人のスタッフとともに頑張る

九〇%の暗雲の中、一〇%の光を追って

貫く信条は「あきらめない」——出来るという確信を持ち、頑張れば必ず実現する。それを堅く信じて前進また前進する人。カナダ出身で、徳島市内にベンチャー企業を立ち上げ、このほど窒化物系LEDウエハー専用測定装置を開発した理学博士・イーヴ・ラクロワさん（三四）を訪ねた。



次の開発構想を進めるラクロワ社長

「徳島は青色ダイオードでは世界の最先端を行っているところ。私もその最先端の地でいろいろ研究したかった」と澄んだ目で当時を回想する。

「あの時、カナダに戻っていたら今日のようなチャンスはつかめていなかったでしょう」とも。

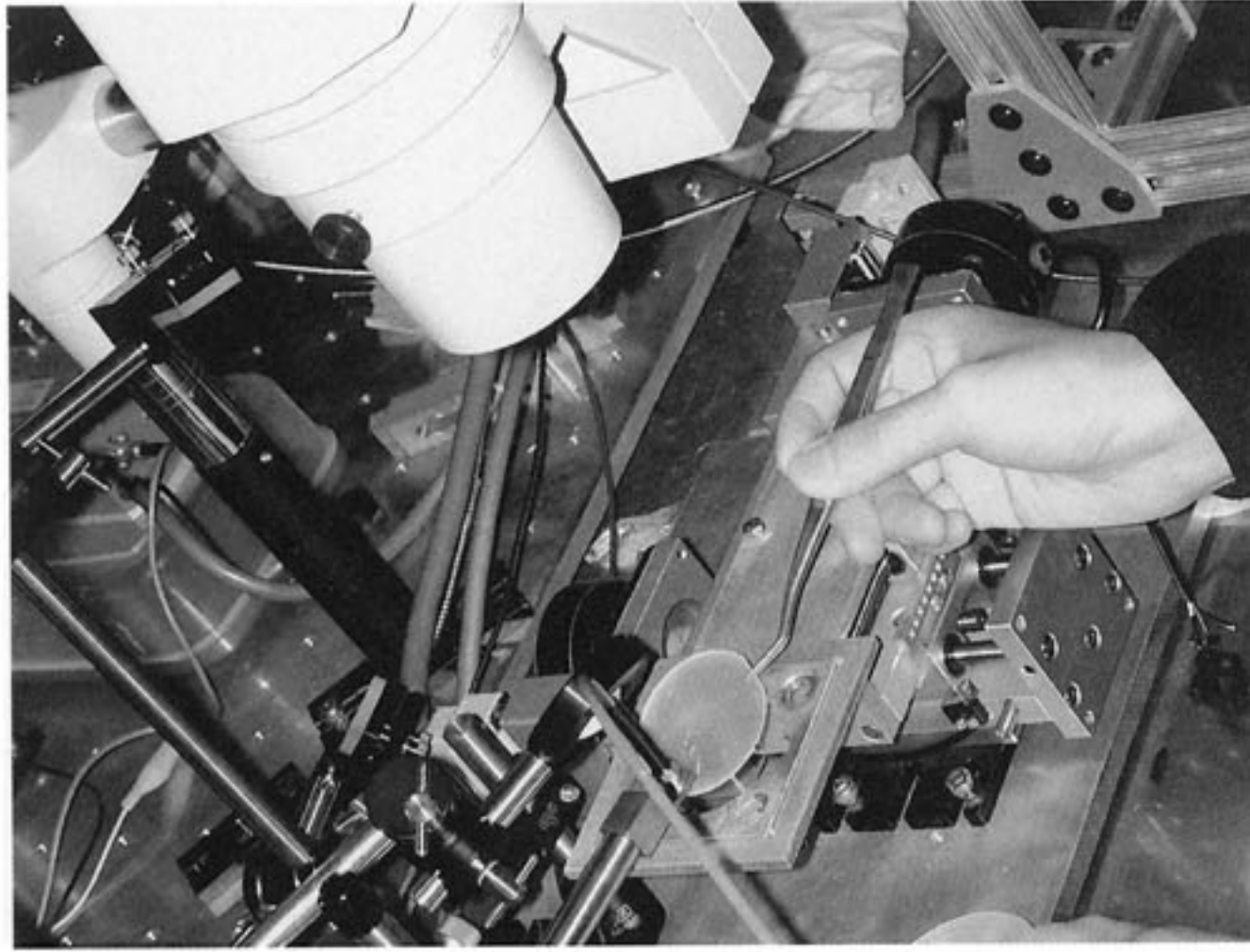
第1号機の完成

徳島大学で、青色レーザー・ダイオードの研究員を求めていることを知った。自分もそこを研究したいとやって来たのが一九九九年一月のこと。

徳島大学では、工学部のサテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリーで「応用」を集中して学び、研究した。

ラクロワさんは、カナダ・モントリオール出身。カナダのサイモン・フレージャー大学の博士過程を一九九六年に終了。さらに研究をと、この年、筑波研究学園都市へ来日、政府の電子技術総合研究所（現在、産業技術総合研究所）で二年間研究を行った。物理を中心に「応用」に近いも

二〇〇〇年十二月、知人を通じ



大学で開発しているようす

て県内の企業が「製品の均一性がわからなくて会社が困っている。その問題に対して何とか解決できないだろうか」との相談があった。現場に行って見たら「何とか出来るそう」との確信を得て、徳島市内の自室へ帰る。

翌日は正月。早朝に目覚め、すぐパソコンに向かう。プログラムを作る。相手に見せると「へー、

こんなものが出来るとは」と驚いた。すぐ製品化に着手。この時、工学部学生一人が共同研究者として加わることに。

研究、開発、試行錯誤の結果、窒化物系LEDウエハー専用測定装置—窒化物に基づいた光学デバイス—の成長において必要な装置を完成させた。

時間確保の苦闘

納期のわずか二週間前のことだった。機械が動き出した時は、二人は手を取り合って完成を喜んだ。

そして第1号機は売れた。二〇〇一年八月のことだったが、確かに苦労が多かった。それは「産みの苦しみ」ではない。時間との闘いだったことだ。

そのころ、ラクロワさんは、徳島大学では、講師として学生に教えていたし、自分の研究も進めていた。さらに加えてこの測定装置の開発・研究があった。

「時間がいくらあっても足りない。それぞれにどう時間を作っていくか。決められた一日二十四時間の中で……」

この測定装置の利点と会社の利点をあげると

- ①値段が非常に安い。これは小さい会社だから出来たこと。大手の会社だと、とてもこんな安価にはならない。
- ②応用のメカなので、使う場所、どこに必要なかをよく知っていた。
- ③客の希望に合致したものを作ることが出来る。
- ④使いやすい。半導体について詳しく知らなくても少し勉強すれば、操作出来る—など。

若いスタッフたち

研究室兼開発室は、ビルの一室、八畳ほどの広さ。ここにラクロワさんを社長に、四人のスタッフがいる。うち二人は徳島大学大学院生。平均年齢二十七歳と若い。デスクが並び、パソコンがあり、各種の測定装置、検査装置、複雑な機器類が据えられている。

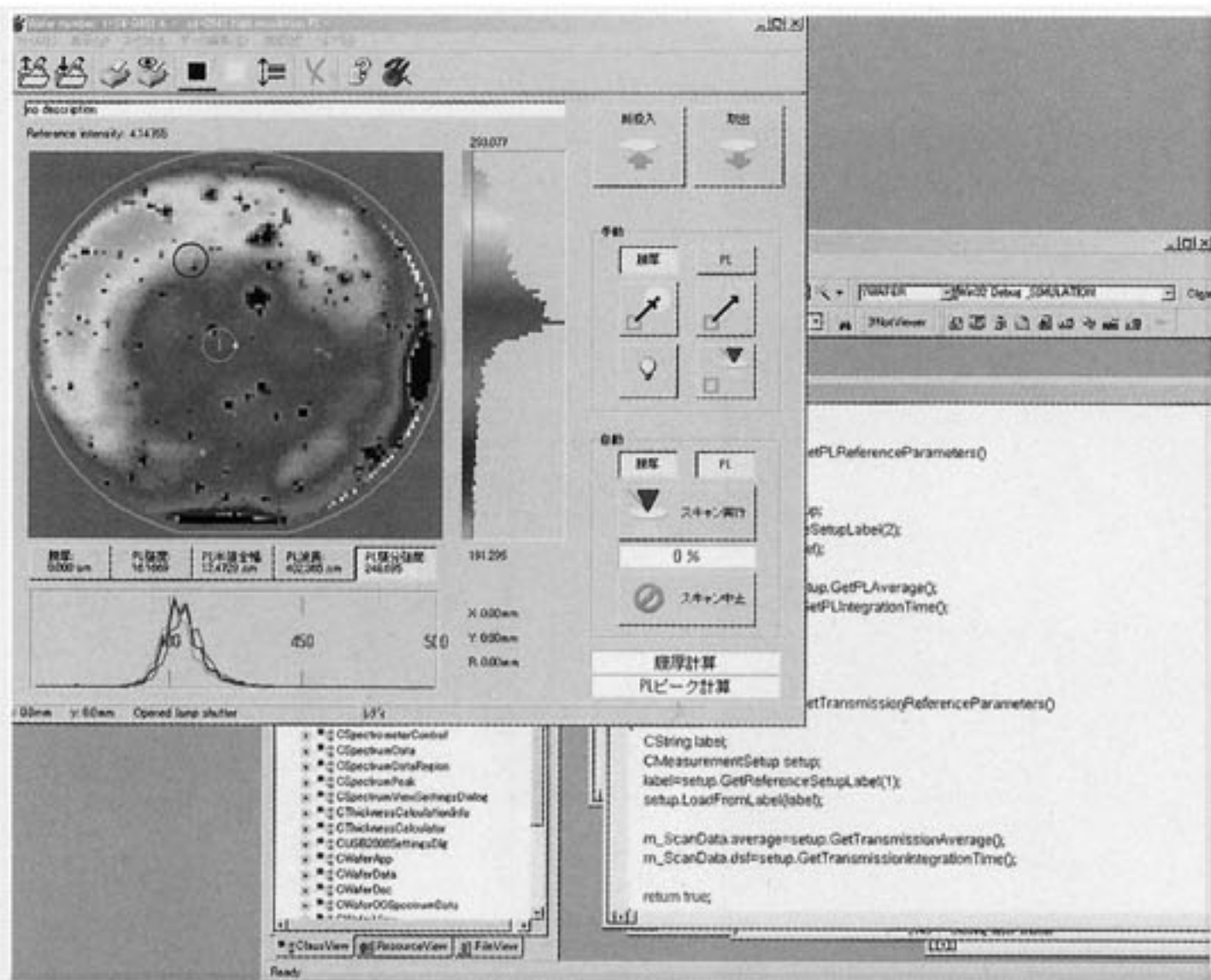
スタッフの一人・藤本英志さん(二八)は言う。

「社長と研究・開発をやって行くのは実に楽しい。今まで出会った研究者とは随分と違った方です。常に前へ、前へと進む。後ろを振

り返らない。研究者は自分の研究の分野だけを深く探ろうとして大局を見据えずに閉じこもってしまふ。社長はそうじゃなくて、広く、多角的に伸びて行く。優れた知恵、優れた頭脳の持ち主ですよ」と誇らしそうに。

進む次の開発

すでに次の開発が進む。とくに



専用測定装置を稼働するソフト

現在、ラクロワさんは韓国のある会社のアドバイザー兼コンサルタントとして工場の立ち上げを終わらせている。今後、その工場では各種の開発しなければならぬ装置が生じてくる。

ラクロワさんは、その現場に足を運び、アドバイザー、コンサルタントとしての「眼」をポイント、ポイントに鋭く注いで、必要とする機器は何か。その場所は、その機能は。と考えをめぐらす。その他、台湾やフィリピンなどにも飛ぶ。同様に必要とするものを探して。

中央通りの拠点にいて、開発、研究に当たるのは月の一、二週間ほど。あとはスタッフに任せて、アジアの各地へ飛ぶ。人々が必要とするもの、人々に役立つものを求めて。

「あきらめなご」が信条

「ベンチャーはゼロから始まる。リスクの高いもので、九〇％は失敗する。アメリカでも、カナダでもベンチャー企業は絶対失敗するとまで言われている。しかし私は、残る一〇％の灯りを求め、負けな

い心で前方を見つめ、頑張っていけば成功すると考える」ラクロワ社長は、淡々と語る。気負いはない。

少年時代、両親から教わって来たのは、やろうと思えば出来ないことはない。出来ると思えば頑張ること。そうすれば必ず実現する——これを心の底に持ち続けて成長した。だから「もしあの時、こうだったら……。もしあの場合、こうしていたら……」などと過去を振り返らない。それは時間の無駄と
言う。

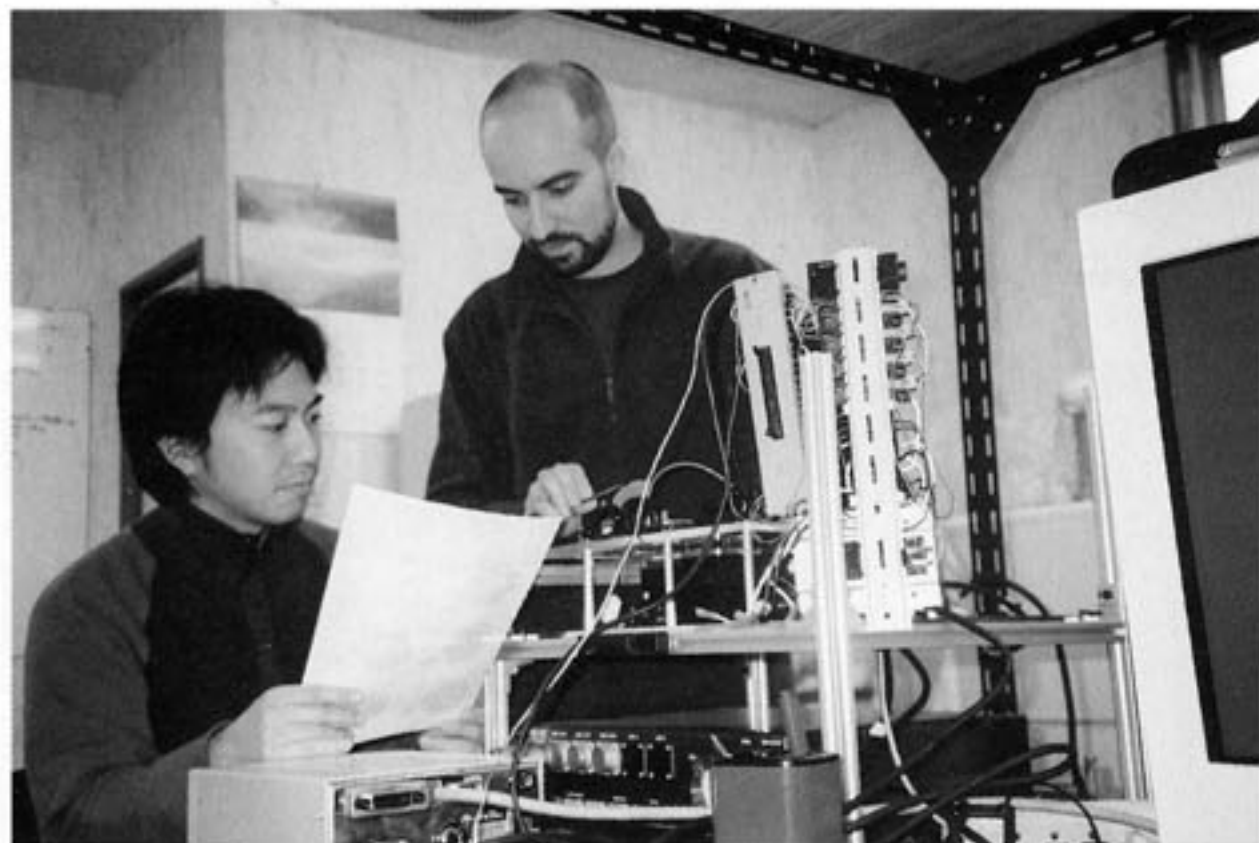
モットーとする言葉は「あきらめなご」

流暢な日本語

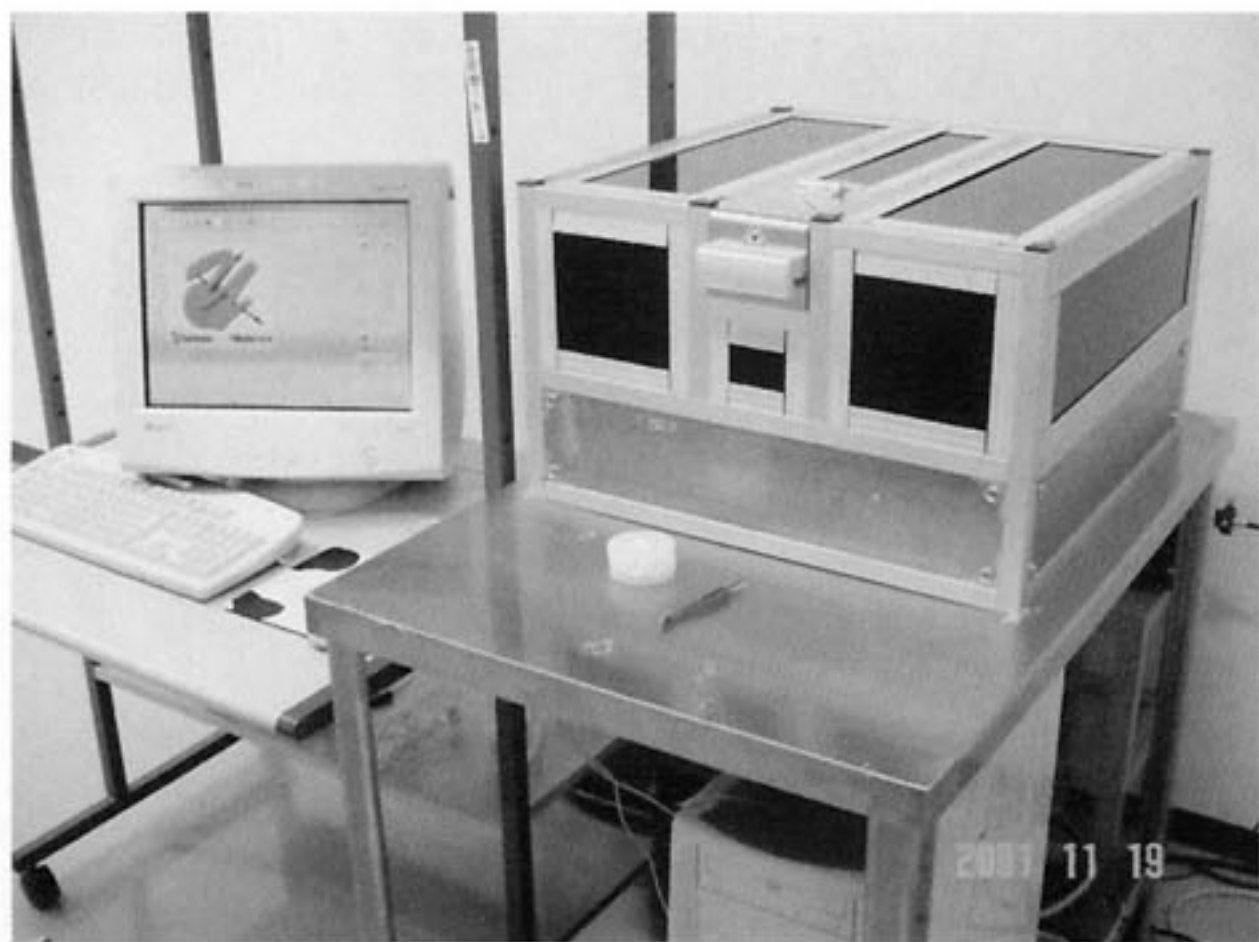
「徳島は小規模な都市なので、人々と、企業家の人々と簡単に交流でき、意見交換がはかれる。大都市だと、営業面では有利でしょうがこうしたコミュニケーションはなかなか達成できないのではなからうか。それに会う人、会う人が皆、親切」と徳島の感想。

「今後も製品の開発に全力挙げて取り組みたい」
インタビューはすべて日本語、

次の開発も着々と進む 拠点とアジア各国を頻繁に往復



開発の進行を話し合うラクロワ社長と藤本研究員



完成した第一号機

その流暢さに驚いた。よどみなかった。

「日本へ来る時、平仮名くらいは読めて、書けるようになっておこうと勉強した。ところが、講演などで、英語で話すと、眠ってしまふ聴衆が多い。研究開発に関すること、専門的なことは何とか日本語で語られるようにならないと理解してもらえない」と痛感。

日本語の習い方、覚え方の本を

十数冊、熟読。さらに実践中心に

して話すことはすべて日本語。分からないことは尋ねる。意味が何通りもある際は、その違いを理解するまで質問して自分のものにする。これを積み重ねて行った。

「二通りの解釈がある時は、一つひとつの意味、使用の箇所を徹底して質問されましたね」と藤本研究員。

前方の灯を見つめて

異国の空の下に住み、人々の幸せを願いつつ、新しい開発へ挑む。困難を困難と言わないで、取り組んで完成させる。グローバル社長は窓外に見える空を見上げた。夜来の雨の名残で、どんより曇った空。この空も必ず明るく晴れた日が来る。太陽の燦爛と降り注ぐ日がすぐ間近に。

それを信じ、確信する目で日本の空を見ていた。研究開発室の諸機器も一機、一器が力強い助っ人のように、インタビュアーには見えた。

DATA 会社概要

会社名/有)ワイ・システムズ
 代表者/取締役社長 イーブ・ラクロワ
 所在地/徳島市中央通1丁目13尾形第1ビル
 203号
 電話番号/088-626-1634
 FAX番号/088-626-1634
 創業/平成13年5月
 資本金/300万円
 スタッフ/4名